

第 66 回

日本人類学会大会

プログラム・抄録集

THE 66TH ANNUAL MEETING OF THE ANTHROPOLOGICAL SOCIETY OF NIPPON

会期：2012年11月2日（金）～4日（日）

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス（横浜市港北区日吉 4-1-1）

名誉大会長： 山崎信寿（慶應義塾大学理工学部 教授）

大会長： 高山 博（慶應義塾大学文学部 教授）

第 66 回日本人類学会大会事務局

慶應義塾大学理工学部機械工学科 荻原直道

〒223-8522 横浜市港北区日吉 3-14-1

E-mail: ogihara@mech.keio.ac.jp

第 66 回日本人類学会大会ホームページ

http://www.gakkai.ne.jp/anthropology/66_annual_meeting/

第 66 回 日本人類学会開催によせて

昨年の東日本大震災で、被害を受けた皆さま、いまだに避難・仮住まいされている方々、研究者の皆さまに心よりお見舞い申し上げます。生活、研究環境などの復帰・復興をお祈り申し上げます。

第 66 回日本人類学会の学術大会・総会を慶應義塾大学日吉キャンパスで開催することになりました。慶應義塾は近代日本黎明期の高等教育組織として、安政 5 年（1858）年に開設されました。最古の近代私学が、やはり最古の学会に近い日本人類学会学術大会をお招きできることに、事務局・組織委員会一同深く御礼申し上げます。

慶應義塾大学における、人類学教育は、1919（大正 8）年にハーバード大学で Ph.D. を取得した移川子之蔵による「人類学概説」が最初とされています。私学としては初めての「人類学」講義が開始されたと思われます。以後、慶應義塾大学での「人類学」講義は、形質・自然人類学を講義する自然科学分野科目として、21 世紀まで維持されてきました。

このたびの第 66 回大会では、一般演題 109、9 つのシンポジウムと 6 つの分科会・教育普及委員会講演会へ 70 余の演題申込みがあり、220 名を超える皆さまの参加登録もいただいております。会場となります日吉キャンパス・来往舎（教養研究センター）は、東急東横線日吉駅から、徒歩 3 分のところにあり、横浜、渋谷、目黒から、約 30 分でお越しいただけます。

大会へ参加される皆さまにおかれましては、活発なご討議、ご議論、ご懇親のうえ、より高い学術研究の場となるよう、慶應義塾伝統の「半学半教」の実践の場となるよう、事務局・組織委員会一同心より祈念しております。

第 66 回日本人類学会大会長

高 山 博

（慶應義塾大学 文学部 人類学研究室）

慶應義塾大学・日吉キャンパス案内図



■ 慶應義塾大学・日吉キャンパス

223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1

■ 交通アクセス

東急東横線、東急目黒線／横浜市営地下鉄グリーンライン 日吉駅下車

- ・東急東横線の特急は、日吉に停車しません。
- ・渋谷～日吉：25分（急行約20分）
- ・横浜～日吉：20分（急行約15分）
- ・新横浜～菊名～日吉：20分

■ 大会会場

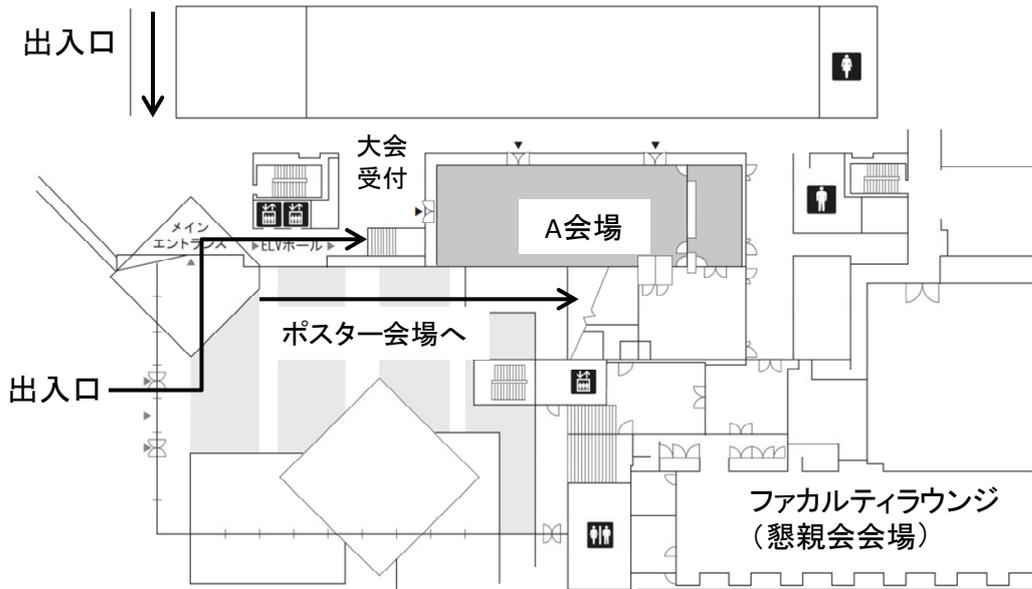
来往舎：大会受付、A,B,C会場、ポスター会場、懇親会会場

藤山記念館：D会場

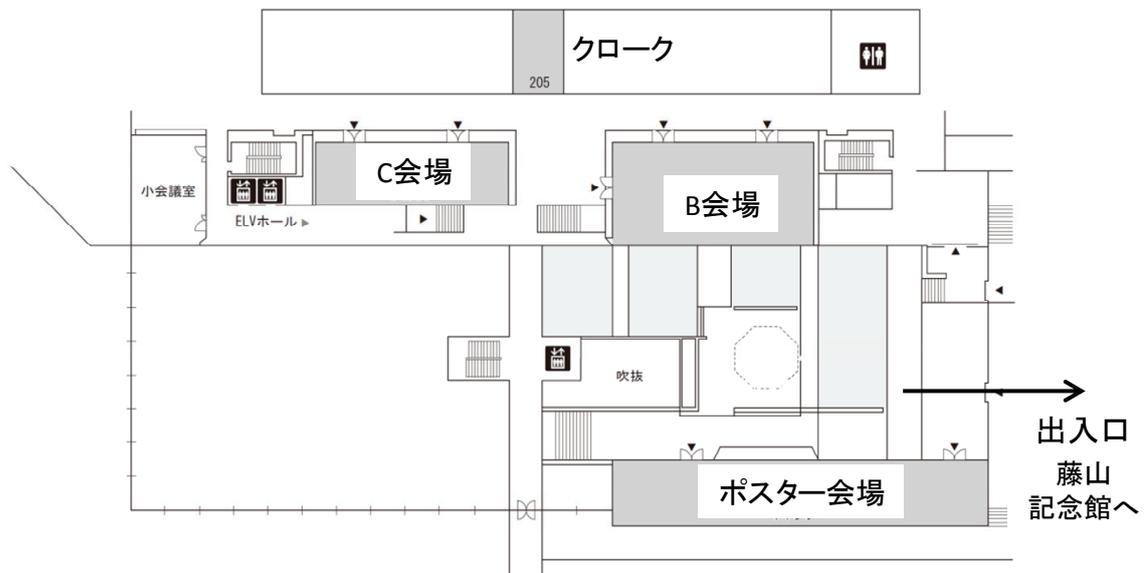
協生館：公開シンポジウム会場

会場案内図

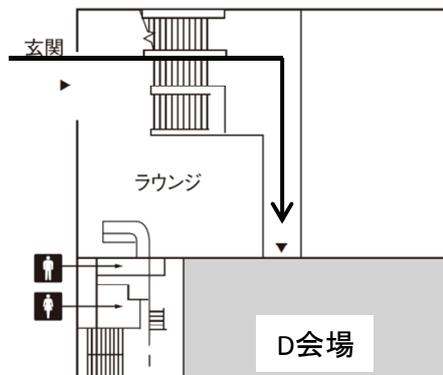
来往舎 1階(A会場)



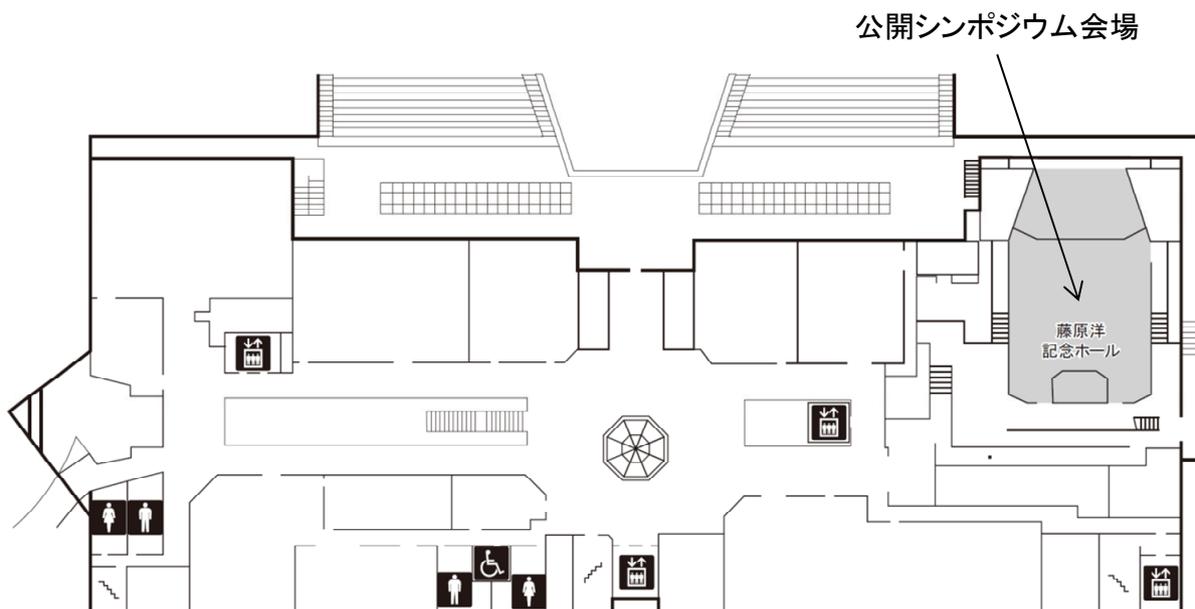
来往舎 2階(B, C, ポスター会場)



藤山記念館 1階(D会場)



協生館 2階



第 66 回日本人類学会大会 大会組織委員会名簿

名誉大会長	山崎信寿	慶應義塾大学理工学部
大会顧問	金澤英作	日本人類学会会長、北原学院歯科衛生専門学校
大会長	高山 博	慶應義塾大学文学部
実行委員	足立 和隆	筑波大学
	五十嵐 由里子	日本大学松戸歯学部
	太田 博樹	北里大学
	荻原 直道	慶應義塾大学理工学部
	影山 幾男	日本歯科大学新潟生命歯学部
	河内 まき子	産業技術総合研究所
	河野 礼子	国立科学博物館
	近藤 修	東京大学大学院
	佐藤 孝雄	慶應義塾大学文学部
	澤浦 亮平	慶應義塾大学
	篠田 謙一	国立科学博物館
	竹内 修二	浜松大学
	奈良 貴史	日本歯科大学新潟生命歯学部
	平田 和明	聖マリアンナ医科大学
	本郷 一美	総合研究大学院大学
	真家 和生	大妻女子大学
	松浦 秀治	お茶の水女子大学
	松村 秋芳	防衛医科大学校
	持丸 正明	産業技術総合研究所
	米田 穰	東京大学総合博物館
事務局	荻原 直道	慶應義塾大学理工学部

日 程 表

11月2日(金)

	A会場	B会場	C会場	D会場	ポスター会場
12:30	12:15 +++++ 参加受付開始 +++++				
13:00	13:00～ S1 骨盤の 形態と機能 (ヘルスサイ エンス分科 会)	13:00～ S2 旧人・新 人の交替劇 における古 気候変動の 影響	13:00～ S3 ベーリン グ陸橋を 渡った後の アメリカ先住 民	13:00～ S4 尻労安 部洞窟遺跡 における更 新世人類の 探求	
14:00					
15:00					
16:00	15:10～ S5 How to "Kinect" for Anthropolog y (キネシオ ロジー分科 会)	15:10～ S6 江戸時 代人の歯と 歯科医療 (歯の人類 学分科会)	15:10～ S7 現生人 類の多様化 と均質化を 遺伝子と文 化から探る	15:10～ S8 上黒岩岩 陰出土犬骨 の研究	ポスター 掲示
17:00	16:50～ S9 列島へ の家畜導入 と人類史－ 動物考古学 の現状と展 望－(骨考 古学分科 会)				
18:00		17:20～ S10 戦没者 遺骨収集事 業と人類学	17:20～ S11 資源を めぐる葛藤と その解決法 の進化史 (進化人類 学分科会)	17:20～ S12 パブ リック考古学 の課題と展 望:研究は 誰のための ものか	
19:00					
20:00	20:00 +++++ 会場閉鎖 +++++				

11月3日(土)

	A会場	B会場	C会場	ポスター会場	その他
8:30	8:30 +++++ 参加受付開始 +++++				
9:00	9:00~ 若手会員発表賞対象 セッション1			ポスター 掲示	
10:00	10:10~ 若手会員発表賞対象 セッション2				
11:00	11:20~ 若手会員発表賞対象 セッション3				11:30~ 理事会
12:00	12:40~ 評議員会・総会				
13:00					
14:00					
15:00					14:30~ 公開シンポジウム「猿の惑星から探るヒトとサル」(協生館2F・藤原洋記念ホール)
16:00					
17:00	17:30 +++++ 会場閉鎖 +++++				
18:00					17:30~ 懇親会(ファカルティ/ラウンジ)

11月4日(日)

	A会場	B会場	C会場	ポスター会場	その他
9:00	9:00 +++++ 参加受付開始 +++++				
10:00	9:30～ 一般口演A1	9:30～ 一般口演B1	9:30～ 一般口演C1	ポスター 掲示	
11:00	10:35～ 一般口演A2	10:20～ 一般口演B2	10:20～ 一般口演C2		
12:00	11:25～ 一般口演A3	11:10～ 一般口演B3	11:25～ 一般口演C3		
				11:30～ ポスター 発表(奇数)	12:00～ AS編集委員 会
13:00				12:30～ ポスター 発表(偶数)	
14:00	13:00～ 一般口演A4	13:00～ 一般口演B4	13:00～ 一般口演C4	ポスター 掲示	
		14:05～ 一般口演B5	13:50～ 一般口演C5		
15:00	14:20～ S13 新課程 教科書と人 類学教育 (日本人類 学会教育普 及委員会)	14:50～ S14 軟部人 類学の再考 —特に動脈 系・末梢神 経系の形態 形成的変異 —	14:50～ S15 ネアン デルタールと サピエンス 交替劇の真 相: 学習能 力の進化に 基づく実証 的研究(3)		
16:00					
17:00	17:30 +++++ 会場閉鎖 +++++				

参加者へのご案内

1. 参加受付について

受付場所： 来往舎 1階 大会受付

受付時間： 11月2日（金） 12:15～20:00

11月3日（土） 8:30～17:30

11月4日（日） 9:00～17:30

当日参加費：

	一般会員	学生会員	非会員
大会参加費	9000円	6000円	9000円
懇親会費	8000円	5000円	8000円

事前登録がお済みの方へ

事前登録受付にお立ち寄りください。参加証（ネームカード）ならびに大会プログラム・抄録集をお渡しいたします。会場内では、必ず参加証（ネームカード）をご着用ください。

当日登録の方へ

当日受付へお越しいただき、登録用紙に必要事項をご記入ください。参加費をお支払いいただき、参加証（ネームカード）と大会プログラム・抄録集をお受け取りください。会場内では、必ず参加証（ネームカード）をご着用ください。

懇親会にご参加の方へ

日時： 11月3日（土） 17:30～（17:00開場）

会場： ファカルティラウンジ（来往舎1階）

当日参加の方は、大会受付にてお申し込みください。懇親会参加費をお支払いいただきましたら、参加証（ネームカード）へ懇親会参加シールを貼付いたします。

2. 評議員会・総会

日時： 11月3日（土） 12:40～

会場： A会場

- ・ 日本人類学会評議員、および同会員の方はご出席ください。
- ・ 会議資料は、当日会場に用意いたします。
- ・ 昼食をかねて行いますので、各自弁当をご持参ください。

3. プログラム・抄録集

プログラム・抄録集の追加購入を希望される方には、大会受付にて1冊2000円で販売いたします。

4. クローク

クロークを設けますので、ご利用ください。なお、貴重品・PCなどはお預かりできませんので、予めご了承ください。受付時間を過ぎますと、お荷物をお返しできない場合がありますので、ご注意ください。

受付時間： 11月2日（金） 12:15～20:00

11月3日（土） 8:30～17:30

11月4日（日） 9:00～17:30

3日の懇親会では、会場内に荷物置き場を設置いたします。貴重品は携帯していただけますようお願いいたします。

5. 食事

会期中はファカルティラウンジをご利用いただくことが可能です。

お弁当は、近隣のコンビニエンスストア等で購入できます。

6. お願いとご案内

- ・ 会場内での飲食は禁止されています。
- ・ 構内は全面禁煙です。喫煙される際は、指定の喫煙所（図書館前、来往舎2階出口付近）をご利用ください。
- ・ 発表中の写真撮影およびビデオ撮影については原則禁止といたします。
- ・ 大会に参加される方の駐車スペースはありません。公共交通機関をご利用ください。
- ・ 来往舎、協生館の3階より上は、研究スペースのため立ち入りを禁止します。

オーガナイザー、座長、発表者の方へ

オーガナイザー、座長の方へのご案内

- ・ご担当するセッション開始の10分前までに会場にお越しください。
- ・各セッションに与えられた時間を超えないよう、セッションの進行をお願いします。

一般演題（口演）発表者へのご案内

機材

1. 発表には液晶プロジェクターを用います。他の機材は使用できませんのでご了承ください。なお、音声は出力できません。
2. 使用するPCは、ご自身のもの、あるいは事務局で用意したものとなります。
3. 事務局で用意するPCのOS及びアプリケーションは、Windows7、Microsoft PowerPoint2010、Macintoshの場合は、MacOS、Microsoft PowerPoint for Mac2011となります。
4. プロジェクターとの接続は、D-sub 15pinとなります。変換ケーブルはご自身でご用意ください。
5. お持ちいただく記憶媒体は、USBフラッシュメモリとします。
6. ご自身のPCをお持ちいただく場合においても、必ず、予備としてファイルを記憶媒体に入れてお持ちください。
7. 大会当日、「発表ファイル受付窓口」を開設いたします。事務局のPCをご使用の発表者は、セッション開始20分前までに窓口で動作確認の上、ファイルをご提出ください。

発表時間

1. 発表者は、セッション開始10分前までにご来場願います。
2. 進行については、座長の指示に従ってください。
3. 一般口演の発表時間は、15分（発表10分、質疑2分）です。時間厳守をお願いします。
4. 若手会員大会発表賞セッションの発表時間は、12分（発表10分、質疑2分）です。

一般演題（ポスター）発表者へのご案内

1. ポスターは、「演題番号」が貼られた指定のパネルに発表者ご自身で時間内に掲示願います。
2. 画鋏のみ会場に準備します。
3. ポスター掲示用のパネルの寸法は、「幅115cm × 高さ190cm」です。パネルに掲示可能なサイズのポスターをご用意ください。

掲示時間： 11月2日（金） 15:00～17:00、11月3日（土） 9:00～12:00

討論時間： 11月4日（日） 11:30～12:30（奇数番号）

11月4日（日） 12:30～13:30（偶数番号）

撤去時間： 11月4日（日） 14:00～15:00

撤去時間を過ぎても掲示されているポスターは、事務局で撤去しますので、あらかじめご了承ください。

若手会員大会発表賞について

日本人類学会大会において、人類学の進歩に寄与する優れた研究発表を自らおこない、将来の発展を期待しうる学生会員および、35歳以下の会員に対し「若手会員大会発表賞」を授与します。（若手会員大会発表賞規定）

応募資格

1. 当該研究発表時点（2012年11月3日）において、日本人類学会の「学生会員」並びに、「35歳以下の一般会員」とする
2. 当該研究発表が共同研究の場合は、筆頭研究者であり発表者であること
3. 発表は、口頭発表に限る
4. 過去において本賞を受けていないこと

応募者多数の場合、選考委員会が発表候補者を選びます。候補者は、大会期間中の「若手会員発表賞」セッションで、自らの演題を口頭発表します。選考委員会は、候補者の発表を審査し、受賞者を選定して、会長へ推薦します。会長は理事を招集し、その議を経て受賞者を決定します。

第66回大会の選考基準と授与について

- ・「学生会員」「35歳以下の一般会員」より原則各1名（計2名）とし、該当者がない場合は授賞を行わない。
- ・選考は、発表内容および発表の技法・説得力などを総合して採点し、5人の選考委員の採点を合計して判定する。同点者複数の場合は、選考委員長が決する。
- ・選考委員長は大会長であるが、各選考委員の氏名は事前に公表しない。
- ・賞は、総会において会長が授与する。

候補者の方々は、総会（3日 12:40～A会場）へご出席ください。

プログラム

若手会員大会発表賞対象セッション1 (学生会員)

11月3日 9:00-10:00 A 会場

座長：荻原直道 (慶應義塾大学)

YA-1 ホミノイドにおける形態-機能-系統の関係性：ヒトおよび大型類人猿の周産期における大腿骨形態の形態地図法による解析

○森本直記、Christoph P.E. ZOLLIKOFER, Marcia S. PONCE DE LEÓN (University of Zurich)

YA-2 運動学データのみに基づくニホンザル二足歩行運動の逆動力学的解析

○濱野理貴、荻原直道 (慶大・理工)

YA-3 霊長類における距骨下関節形態の幾何学的形態解析

○後藤遼佑、熊倉博雄 (大阪大・人間科学)

YA-4 歯冠咬合面形態計測時の誤差の検討：3次元CT画像を用いて

○石井理子 (東京大・理)

YA-5 ヒト上顎第一大臼歯、第二乳臼歯歯冠形態構造のモジュール性

○森田 航 (京都大・理)、矢野 航 (朝日大・歯)、長岡朋人 (聖マリアンナ医大・解剖)、中務真人 (京都大・理)

若手会員大会発表賞対象セッション2 (学生会員)

11月3日 10:10-11:10 A 会場

座長：木村亮介 (琉球大学)

YA-6 青森県五月女菴遺跡出土人骨の形態学的検討

○波田野悠夏 (日本歯科大・新潟生命歯)、江面晃 (日本歯科大・新潟生命歯・総合診療科)、田中聖至 (日本歯科大・新潟生命歯・小児歯科学)、佐々木善彦 (日本歯科大・新潟生命歯・歯科放射線学)、鈴木敏彦 (東北大・院歯・口腔器官構造)、奈良貴史、影山幾男 (日本歯科大・新潟生命歯・解剖1)

YA-7 江戸時代一橋高校遺跡における成人・小児の安定同位体分析を用いた食性復元

○葛谷匠 (東京大・新領域)、長岡朋人 (聖マリ医大・解剖)、澤田純明 (聖マリ医大・解剖)、平田和明 (聖マリ医大・解剖)、米田穰 (東京大・総合博)

YA-8 動物遺存体および化石における古代DNA分析の新たなプレスクリーニング法

○覚張隆史 (東大・総合研究博物館)、太田博樹 (北里大・医)、大谷進 (山梨大・医)、米田穰 (東大・総合研究博物館)

YA-9 GSTM1 および GSTT1 欠失多型の頻度は緯度に対して逆の相関を示す

○齊藤真理恵（東大・院理）

YA-10 現代日本人の寒冷適応能とミトコンドリアハプログループの関係について

○西村貴孝（九州大・芸工）、本井碧（九州大・統合新）、星良和（東海大・農）、近藤隆一郎（九州大・農）、太田博樹（北里大・医）、綿貫茂喜（九州大・芸工）

若手会員大会発表賞対象セッション3（一般会員）

11月3日 11:20-12:20 A 会場

座長：太田博樹（北里大学）

YB-1 琉球諸島と北部九州におけるクローン病の遺伝と環境の相互作用に関する人類学的考察

○中込滋樹、間野修平（統数研）、知念寛、伊良波淳、金城福則、藤田次郎、石田肇（琉球大・医）、木村亮介（琉球大・超域機構）、竹山康章、向坂彰太郎（福岡大・医）、松井敏幸（福岡大・筑紫病院）、Kidd J. R.、Kidd K. K.（イエール大・医）、森田英利（麻布大・獣医）、Said H. S.、須田互、河村正二、服部正平（東京大・新領域）、埴原恒彦、太田博樹（北里大・医）

YB-2 ゲノムワイド SNP データに基づく琉球列島の人々の集団構造

○佐藤丈寛、川口亮、石田肇（琉球大・医）、山口徹太郎（昭和大・歯）、山本健（九州大・生体防御）、河村正二（東京大・新領域）、中込滋樹、間野修平（統数研）、埴原恒彦、太田博樹（北里大・医）、渡辺千晶、山口今日子、木村亮介（琉球大・超域機構）

YB-3 ヒトとメダカ共通に観察された地域集団間の性的二型の程度の違いに關与する遺伝的多型

○勝村啓史（北里大・医）、尾田正二（東大・新領域）、三谷啓志（東大・新領域）、埴原恒彦（北里大・医）、河村正二（東大・新領域）、太田博樹（北里大・医）

YB-4 胎児期から乳児期の発達原理に基づくヒトの脳化の進化的基盤の解明

○酒井朋子（京都大・霊長研）、平田聡（京都大・霊長研）、竹下秀子（滋賀県立大・人間文化）、松井三枝（富山大・医学薬学）、三上章允（中部学院大・リハビリ）、濱田穰（京都大・霊長研）、松沢哲郎（京都大・霊長研）

YB-5 移行期文化と芸術の爆発

○中橋渉（明治大・MIMS）

一般口演 A1 (形態・古人骨)
座長：星野敬吾 (聖マリアンナ医科大学)

11月4日 9:30-10:30 A会場

A-01 Reconstructing stress episode duration using incremental microstructures of enamel among Middle to Final Jomon period foragers

○ダニエル・テンプル (ノースカロライナ大・人類)、中務真人 (京都大・理)

A-02 日本列島における縄文時代人の体形の地域変異とその生態地理学的意義

○深瀬均 (北海道大・医)、分部哲秋、弦本敏行、佐伯和信 (長崎大・医)、藤田祐樹 (沖縄県博)、石田肇 (琉球大・医)

A-03 大腿骨骨幹断面形を用いた縄文人・現代日本人の性別判定

○水嶋崇一郎、平田和明 (聖マリアンナ医大・解剖)

A-04 縄文時代から近代に至る骨盤形態の比較

○高椋浩史 (九州大・比文)

一般口演 A2 (形態・古人骨)
座長：長岡朋人 (聖マリアンナ医科大学)

11月4日 10:35-11:20 A会場

A-05 群馬県出土中近世人骨の頭蓋骨縫合早期癒合症

○榎崎修一郎 (生物考古研)

A-06 エジプト ダハシュール北遺跡出土人骨の大腿骨近位端部の骨病変例

○平田和明 (聖マリアンナ医大・解剖)、吉村作治 (早大・名誉教授)、近藤二郎 (早大・文学学術院)、矢澤健 (早大・エジプト学研究所)

A-07 京都市伏見城跡から出土した江戸時代人骨の齶蝕

○藤澤珠織 (青森中央短大・看護)、大藪由美子 (奈良県立橿原考古学研究所)、丸山真史 (奈良文化財研究所)

一般口演 A3 (歯)

11月4日 11:25-12:10 A会場

座長：五十嵐由里子（日本大学松戸歯学部）

A-08 *WNT10A* の多型は歯冠サイズと関連する

○木村亮介、渡辺千晶（琉球大・超域機構）、山口徹太郎、槇宏太郎（昭和大・歯）、武田麻耶子（東京大・理）、川口亮、石田肇（琉球大・医）

A-09 頭蓋計測点近傍での三次元構造的偏倚の原因探索：歯の咬耗度または年齢との関係

○溝口優司（科博・人類）

A-10 下顎第3大臼歯の植立状況の変化—過去と現在

○山田博之（愛知学院大・歯・解剖）

一般口演 A4 (古人骨・軟部)

11月4日 13:00-14:00 A会場

座長：奈良貴史（日本歯科大学新潟生命歯学部）

A-11 エジプトのアブ・シール南丘陵遺跡出土人骨 —ラムセス2世の孫娘はどの人骨か—

○馬場悠男（国立科学博物館・人類）、坂上和弘（国立科学博物館・人類）

A-12 中国山東省北阡遺跡・二次葬墓出土の大文口時代人骨

○中橋孝博（九州大・比文）、岡崎健治（鳥取大・医）、高椋浩史（九州大・比文）、欒宝実（山東大・考古）

A-13 台湾近世ブヌン族丹社群の粟作農耕集団にみられる口腔病理とその性差

○岡崎健治（鳥取大・医）、蔡佩穎（台湾大・医学人文博）、廬国賢（台湾大・医）

A-14 左心室内表面形態と血流との関係

○澤野啓一（神奈川歯科大）、高橋常男（同）、田中健（江戸川病院）、加藤正弘（同）、萩原浩明・井上登美夫（横浜市大医・放射線科）、横山高玲・佐藤充・立石健祐・川原信隆（横浜市大医・脳神経外科）

一般口演 B1 (遺伝・霊長類)

11月4日 9:30-10:15 B会場

座長：隅山健太 (国立遺伝学研究所)

B-01 遺伝子上流領域とコーディング領域の進化速度の比較；ヒト、類人猿、霊長類、哺乳類

○松田祐太 (東大・院理)、植田信太郎 (東大・院理)

B-02 霊長類での X 染色体と常染色体との遺伝的多様性の比について

○長田直樹 (遺伝研・進化遺伝)

B-03 色覚多型を示す新世界ザル野生集団における苦味受容体遺伝子群の種内変異と採食果実の香気成分分析

○河村正二 (東京大・新領域)、櫻井兎太摩 (東京大・新領域)、白須未香 (東京大・農学生命)、松下裕香 (東京大・新領域)、Amanda MELIN (Univ. Calgary・Dept. Anthropol., Dartmouth College・Dept. Anthropol.)、Mackenzie BERGSTROM (Univ. Calgary・Dept. Anthropol.)、今井啓雄 (京都大・霊長研)、東原和成 (東京大・農学生命)、太田博樹 (北里大・医)、Filippo AURELI (Liverpool John Moores Univ.・Res. Cent. Evol. Anthropol. Palaeoecol.)、Linda FEDIGAN (Univ. Calgary・Dept. Anthropol.)

一般口演 B2 (遺伝)

11月4日 10:20-11:05 B会場

座長：河村正二 (東京大学)

B-04 人類進化におけるゲノム非コード領域転写調節機能進化解析の試み

○隅山健太 (国立遺伝研・集団遺伝)、斎藤成也 (国立遺伝研・集団遺伝)

B-05 東アジアで正の自然選択を受けた Tribbles Homolog2 遺伝子多型は腹囲径よりも内臓脂肪面積と強く関連する

○中山一大 (自治医大・人類遺伝)、宮下洋 (自治医大学附属病院)、田原康玄 (京都大・医)、柳沢佳子 (花王株式会社)、恩田智彦 (花王株式会社)、片嶋充弘 (花王株式会社)、岡田浩一 (パナソニック株式会社)、福島省吾 (パナソニック株式会社)、香川靖雄 (女子栄養大)、岩本禎彦 (自治医大・人類遺伝)

B-06 南米少数民族における Y ハプログループの比較

○山本敏充、佐久間政宜、加納佑一、川口裕佳 (名大・医)、檀上稲穂、中村幸夫 (理研・BRC)

一般口演 B3 (遺伝・DNA)

11月4日 11:10-12:10 B会場

座長：安達登 (山梨大学)

B-07 ファイス島出土人骨のミトコンドリアDNA分析

○篠田謙一 (国立科学博物館・人類研究部)、印東道子 (国立民族学博物館・民族社会研究部)

B-08 候補遺伝子アプローチによる日本人皮膚色の関連遺伝子多型の同定

○山口今日子 (琉球大・医/超域機構)、川口亮、石田肇 (琉球大・医)、青木健一 (東京大・理)、渡辺千晶、木村亮介 (琉球大・超域機構)

B-09 常染色体にみられる日本人特異的遺伝子の分布

○湯浅勲 (鳥取大・医)、梅津和夫 (山形大)

B-10 次世代シーケンサーを用いた縄文人 DNA 分析の試み

○神澤秀明 (総研大・遺伝/遺伝研・集団)、佐宗亜衣子 (東大・理/博物館)、諏訪元 (東大・博物館)、細道一善 (遺伝研・人類)、井ノ上逸朗 (総研大・遺伝/遺伝研・人類)、篠田謙一 (科博・人類)、斎藤成也 (総研大・遺伝/遺伝研・集団)

一般口演 B4 (遺伝・DNA)

11月4日 13:00-14:00 B会場

座長：篠田謙一 (国立科学博物館)

B-11 縄文系の人達の mtDNA 多型分布：日本各地における変化

○住 斉 (東京大、人類学)、針原伸二 (東京大、人類学)、田中雅嗣 (東京都老人総合研)、山田芳司 (三重大、ライフサイエンス研究センター)、井原邦夫 (名古屋大、遺伝子実験施設)、伊藤 繁 (名古屋大、遺伝子実験施設)、石浦正寛 (名古屋大、遺伝子実験施設)

B-12 関東地方縄文時代人のミトコンドリア DNA 解析

○安達 登 (山梨大・医)、篠田謙一 (科博・人類)、澤田純明 (聖マリアンナ医大・医)、坂上和弘 (科博・人類)

B-13 常染色体および Y 染色体 STR 多型もとづく『アイヌ-沖縄同系論』の検証

○太田博樹 (北里大・医)、小金渕佳江、勝村啓史、河村正二 (東京大・新領域)、中込滋樹 (統数研)、石田肇 (琉球大・医)、アジア人古収集 DNA レポジトリ-コンソーシアム

B-14 アメリカ先住民諸言語の南島語族諸分枝からの多回起源とユーラシア諸言語との系統関係: 基礎身体部分名称語彙の比較による解析

○大西耕二 (新潟大・理フェロー)

一般口演 B5 (生理・成長)

11月4日 14:05-14:35 B会場

座長: 足立和隆 (筑波大学)

B-15 手指をターゲットにもっていき運動と、手に持つ道具の先端をターゲットにもっていき運動とは異なったプログラムで制御されている

魚谷恭太郎(杏林大・医)、本郷利憲 (都神経研・神経生理)、佐々木成人 (都神経研・神経生理)、内藤公郷(杏林大・医)、稲富貴美(杏林大・医)、○平井直樹(杏林大・医)

B-16 幼児期における運動発達を規定する要因について

○岩田浩子 (聖霊女子短大・生活文化科)

一般口演 C1 (霊長類・生態)

11月4日 9:30-10:15 C会場

座長：高野 智 (日本モンキーセンター)

C-01 同所的に住むオナガザル科霊長類の歯冠形態と採食される葉の堅さ

○清水大輔 (日本モンキーセンター)、田代靖子 (林原類人猿研究センター)、橋本千絵 (京都大・霊長研)、五百部裕 (椙山女学園大・人間関係)

C-02 ヒヒ族霊長類における上顎洞の形成について

○西村剛 (京大・霊長類研)、矢野航 (朝日大・歯)、伊藤毅 (京大・霊長類研)

C-03 ウガンダ、カリンズ森林に生息するオナガザル科霊長類 4 種 の食物重複

○五百部裕 (椙山女学園大・人間関係)、田代靖子 (林原類人猿研究センター)、郷もえ (京都大・霊長研)

一般口演 C2 (化石人類)

11月4日 10:20-11:20 C会場

座長：河野礼子 (国立科学博物館)

C-04 後期中新世ケニア、ナカリにおける最近の調査成果について

○中務真人 (京都大・理)、國松豊 (京都大・理)、仲谷英夫 (鹿児島大・理)、酒井哲弥 (島根大・総合理工)、實吉玄貴 (林原自然科学博物館)、沢田順弘 (島根大)、エマ・ムブア (ケニア国博)

C-05 Highland fauna from a new Pliocene site in Kenya

○エマ・ムブア (ケニア国博・地球科学)、國松豊 (京都大・理)、中務真人 (京都大・理)

C-06 エチオピア南部、初期アシュール型石器を伴うコンソ層の年代層序について

○諏訪 元 (東京大・総合博)、加藤茂弘 (兵庫人博)、兵頭政幸 (神戸大)、近藤 恵 (お茶の水大)、B. Asfaw (R.V.R.S.)、Y. Beyene (C. F. E.E.)

C-7 保存良好なジャワ原人化石サンギラン9号頭蓋の形態

○海部陽介 (国立科博・人)、Y. ザイム (バンドン工科大・地)、I. クルニアワン (バンドン地質調査所)、久保大輔 (東大・理)、Y. リーツェル・J. アリフ (バンドン工科大・地)、F. アジズ (バンドン地質調査所)、馬場悠男 (国立科博・人)

一般口演 C3 (形態・生体)

11月4日 11:25-12:10 C会場

座長：海部陽介 (国立科学博物館)

C-08 マイクロCTデータと三次元プリンターモデルを用いたLB1の頭蓋腔容積の修正

○久保大輔 (東大・理)、海部陽介 (科博・人類)、T. SUTIKNA、E. W. SAPTOMO、JATMIKO (インドネシア国立考古学研究開発センター)

C-09 ヒト中手・中足骨・基節骨の曲げ丈夫さから見た進化過程について

○木村 賛(東京大学)

C-10 2D：4D比は性ホルモン関連形質の指標として妥当なのか？

○米須学美、川口亮、佐藤丈寛、石田肇 (琉球大・医)、山口今日子、渡邊千晶、木村亮介 (琉球大・超域機構)

一般口演 C4 (機能形態・年代・先史考古)

11月4日 13:00-13:45 C会場

座長：鶴澤和宏 (東亜大学)

C-11 神経筋骨格モデルに基づくニホンザル二足歩行運動の順動力学シミュレーション

○荻原直道、井出直彦 (慶大・理工)

C-12 グスク時代の農耕和文タイトル

○高宮広土 (札幌大・文化)

C-13 山下町第一洞穴人骨の産出層位に関する新たな知見

○松浦秀治、近藤 恵 (お茶大・自然人類)、藤田祐樹 (沖縄県博・美)、久保麦野、諏訪 元 (東京大・総博)

一般口演 C5 (古人骨・古環境)

11月4日 13:50-14:35 C会場

座長：米田穰 (東京大学)

C-14 インカ帝国内での食性の地域差

○瀧上舞 (山形大・人文)、米田穰 (東京大・博物館)

C-15 MSMs からみた縄文・弥生時代集団の生業活動の変化

○米元史織 (九大・比文)

C-16 國府・伊川津人骨の炭素・窒素安定同位体による食性解析

○日下宗一郎（総合地球環境学研究所），米田穰（東大・総合博），佐宗亜衣子（東大・総合博），中野孝教（総合地球環境学研究所）

ポスター発表

11月4日 11:30-12:30 (奇数番号) ポスター会場

11月4日 12:30-13:30 (偶数番号) ポスター会場

P-01 ニホンザル腹鋸筋の筋線維タイプ構成

○小島龍平 (埼玉医大・保健医療)

P-02 コーンビームCT解析によるニホンザル下顎骨に存在する小孔の意義について

○佐藤巖 (日歯大・生命歯・解剖)、吉田俊爾 (日歯大・生命歯・解剖)、三輪容子 (日歯大・生命歯・解剖)、春原正隆 (日歯大・生命歯・解剖)、代居敬 (日歯大・生命歯・歯放線)、島田和幸 (鹿大・医歯学系院・神経解剖)

P-03 霊長類3種の頭蓋顔面形態形成の比較研究

○矢野航 (朝日大・歯)、江木直子 (京都大学・霊長類研究所)、高野智 (日本モンキーセンター)、荻原直道 (慶応大学・理工)、西村剛 (京都大学・霊長類研究所)、

P-04 日本およびアジア集団におけるヒト四肢骨の形態的特徴

○久高将臣 (琉球大・医)、深瀬均 (北海道大・医)、木村亮介 (琉球大・超域機構)、埴原恒彦 (北里大・医)、松村博文 (札幌医大・医)、佐宗亜衣子 (東京大・理)、譜久嶺忠彦、石田肇 (琉球大・医)

P-05 相同モデリングを用いたヒト顔面の三次元形態解析

○宮里絵理、石田肇 (琉球大・医)、河内まき子、持丸正明 (産総研・デジタルヒューマン) 山口今日子、木村亮介 (琉球大・超域機構)

P-06 コーンビームCTによる日本人成人下顎骨体積評価

○方山光朱 (昭和大・歯)、山口徹太郎 (昭和大・歯)、槇宏太郎 (昭和大・歯)

P-07 三次元CT画像を用いたペルー変形頭蓋骨の計測学的検討

○矢山和宏 (京都府警科捜研、関西医大脳神経外科)、河本圭司 (関西医大)、石井益子 (千葉県警科捜研)、加藤克知 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科)、浅井昭雄 (関西医大脳神経外科)

P-08 形状データベースを活用した化石頭蓋骨の欠損補間

○天野英輝、森田祐介、長野裕保、荻原直道 (慶大・理工)

P-09 Burial Patterns Analysis of Shahr-e Sukhte Graveyard

○Farnaz KHATIBIJAFARI (東京大)、Kamal-Aldin NIKNAMI, Stéphane ROTTIER

P-10 伊達市ポンマ遺跡における近世アイヌ文化期の小児の埋葬について

○青野友哉（伊達市噴火湾文化研究所）、永谷幸人（伊達市噴火湾文化研究所）、近藤修（東京大・理）

P-11 白保竿根田原洞穴遺跡出土の人骨—出土状態から探る石垣島旧石器時代人の葬法

○土肥直美（琉球大・医）、藤田祐樹、片桐千亜紀、山崎真治（沖縄県立美術館・博物館）、徳嶺里江（沖縄県立埋蔵文化財センター）

P-12 古人骨中の窒素・炭素含有量を利用した有機成分の保存の推定法と日本試料への応用の検討

○板橋悠（東京大・新領域）、米田穰（東京大・博物館）

P-13 沖縄県南城市ハナダガマから出土した後期更新世シカ類の古生態復元

○久保麦野（東京大・総博）、藤田祐樹（沖縄県博）、山田英佑、仲谷英夫（鹿児島大・理工）、大城逸朗（おきなわ石の会）、諏訪 元（東京大・総博）

P-14 縄文人の生存曲線を推定する試み—歯髓腔狭窄現象と最尤法を用いた手法の検討—

○佐々木智彦（東大・人類）

P-15 筋骨格ストレスマーカー(MSM)における弥生人の地域間変異と縄文人との相違

○瀧川渉（国医福大・福岡リハ）

P-16 中国山東省北阡遺跡出土大汶口文化期人骨の頭蓋形態小変異

○分部哲秋、佐伯和信、弦本敏行、岡本圭史（長崎大・院医歯薬・肉眼形態）、北川賀一（長崎大・院医歯薬・顎顔面形態）、岡崎健治（鳥取大・医・形態解析）、欒豊実（山東大・東方考古研）、中橋孝博（九州大・院比較文化）

P-17 鎌倉市中世集団墓地遺跡（青果市場地点）から出土した人骨

○長岡朋人（聖マリアンナ医大・解剖）、澤田純明（聖マリアンナ医大・解剖）、清家大樹（聖マリアンナ医大・解剖、筑波大・人文）、平田和明（聖マリアンナ医大・解剖）

P-18 井戸跡から出土する頭蓋群—熊本市二本木遺跡群

○松下真実・松下孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）

P-19 沖縄県北谷町平安山原 A 遺跡出土の鉄器の刺さった人骨について

○片桐千亜紀、藤田祐樹（沖縄県博）、土肥直美（琉大医）、松原哲志、山城安生（北谷町教委）

P-20 鹿児島県鹿屋市立小野堀遺跡出土の古墳時代人骨

○竹中正巳、下野真理子（鹿児島女子短大）

P-21 返子市 No.9 遺跡出土の江戸時代頭蓋の厚さについて

○吉田俊爾、佐藤巖（日歯大・生命歯）

P-22 縄文人骨の歯周疾患に関する予備的調査：千葉県姥山人骨を例に

○佐宗亜衣子（東大・理，東大・総合博），近藤修（東大・理）

P-23 南九州古墳時代人骨に認められた融合歯

○下野 真理子、竹中 正巳（鹿児島女子短期大学）

P-24 ヒト組織中のアスパラギン酸のラセミ化率の比較

○大谷 進（山梨大・医・法医）、覚張隆史（東大・総合博物館）、猩々英紀、安達 登（山梨大・医・法医）

P-25 関東地方江戸時代人におけるエナメル質減形成の出現状況

○澤田純明（聖マリアンナ医大・解剖）、平田和明（聖マリアンナ医大・解剖）

P-26 Y染色体・mtDNA の分析による縄文・弥生人分布

○十塚正治（尼崎小田高）、佐藤陽一（徳島大・ヘルスバイオサイエンス研究部）、田中雅嗣（東京都老人総合研究所）

P-27 $\beta 2$ アドレナリン受容体遺伝子(*ADRB2*) 上流領域 SNP の進化遺伝学的解析

○中伊津美（筑波大・医）、土屋尚之（筑波大・医）、大橋順（筑波大・医）

P-28 韓国人の 55 と 7%はそれぞれ弥生系と縄文系日本人と同じ mtDNA 多型を持つ

○住 斉（東京大、人類学）、針原伸二（東京大、人類学）、田中雅嗣（東京都老人総合研）、

P-29 渡来系弥生人骨における耳垢型決定遺伝子(*ABCC11*)解析の試み

○佐伯和信（長崎大院・医歯薬・肉眼形態）、吉浦孝一郎（長崎大院・医歯薬・人類遺伝）、岡本圭史、弦本敏行、分部哲秋（長崎大院・医歯薬・肉眼形態）

P-30 mtDNA 分析による出土魚骨の種判別：沖縄県勝連城跡からの魚骨を用いた可能性調査

○川口 亮（琉球大・医）、菅原広史（浦添市教委）、木村亮介（琉球大・超域機構）、石田 肇（琉球大・医）

P-31 ケニア北部産・中期中新世の類人猿 *Nacholapithecus kerioi* における下部胸椎形態

○菊池泰弘（佐賀大・医）、中野良彦（大阪大・人間科学）、中務真人（京都大・理）、國松豊（京都大・理）、清水大輔（日本モンキーセンター）、荻原直道（慶応大・理工）、辻川寛（東北文化学園大・医療福祉）、高野智（日本モンキーセンター）、石田英實（聖泉大・看護）

P-32 マカクザルにおける頭蓋内面の圧痕と脳表面との相関

○小林靖 (防衛医大), 松井利康 (防衛医大), 灰塚嘉典 (杏林大・医), 荻原直道 (慶応大・理工), 平井直樹 (杏林大・医), 松村讓兒 (杏林大・医)

P-33 マカク属における大白歯エナメル質の厚み

○加藤彰子 (愛知学院大・歯), Amanda Papakyrikos (ウェルズリー大), Nancy Tang (ハーバード大・人類進化生物), 國松豊 (京都大・理), Katie Hinde (ハーバード大・人類進化生物), Ellen Miller (ウェイクフォレスト大), 大野紀和 (愛知学院大・歯), Tanya Smith (ハーバード大・人類進化生物)

P-34 ミャンマー中部グウェビン地域から産出した後期鮮新世のコロブス亜科化石について

○高井正成 (京都大・霊長研), 西岡祐一郎 (京都大・霊長研), タウンタイ (シュウェボー大), ジンマウンマウンティン (マンダレー大)

P-35 大型類人猿の肘関節における一関節筋と二関節筋について

○大石元治 (日獣大・獣医), 荻原直道 (慶大・理工), 清水大輔 (日本モンキーセンター), 菊池泰弘 (佐賀大・医), 平崎鋭矢 (京大・霊長研), 江木直子 (京大・霊長研), 尼崎肇 (日獣大・獣医)

P-36 新世界ザルの上顎大白歯進化傾向とその考察

○堀 智彦 (東京ガス技術研究所)

P-37 果実生産量と栄養状態が野生ボルネオ・オランウータンの雌の妊娠に与える影響

○久世濃子 (京大・野生研), 金森朝子 (京大・霊長研), 山崎彩夏 (農工大・連合農学), 田島知之 (京大・理), ヘンリー・ベルナルド (マレーシア・サバ大), ペーター T マリム (マレーシア・サバ野生生物局), 幸島司郎 (京大・野生研)

P-38 サバンナヒヒの肉食行動：なぜ、肉は奪われないのか？

○松本品子 (琉大・観光)

P-39 アカアシドゥクラングールのぶら下がりロコモーションの性差 —キンシコウとの比較—

○藤野 健 (東京都老人研)

P-40 投擲運動のキネマティクス

○日暮泰男, 熊倉博雄 (大阪大・人間科学)

P-41 若年成人における関節可動域にみられる全身的共変動パターン

○諸見里恵一, 石田肇 (琉球大・医), 深瀬均 (北海道大・医), 山口今日子, 木村亮介 (琉球大・超域機構)

P-42 MP 関節屈曲位置に着目したハイヒール靴型修正方法と履き心地の関係

○河内まき子（産総研・DHRC）、元田真吾（産総研・DHRC）、小林吉之（産総研・DHRC）、持丸正明（産総研・DHRC）

P-43 利他行動は「クジャクの羽根」か？

○小田亮、柴田成儀（名古屋工大）、清成透子（青山学院大・社会情報）、武田美亜（青山学院女子短大・現代教養）、松本晶子（琉球大・観光）

P-44 日本人類学会教育普及委員会活動報告 2012

○松村秋芳（防衛医大）・米田穰（東京大）・近藤修（東京大）・日本人類学会教育普及委員会

P-45 身体機能より BMI を予測し体重を算出

○矢崎勝巳（矢崎郷土史研究所）

P-46 ワラビの地下茎採取活動からみた縄文中期農耕

○杉山是清（個人会員）

P-47 トラウマ進化論 ー東日本大震災から学び、活かすべきことー

○中山孔壹（中山歯科矯正医院）

P-48 現生人類の出アフリカ新仮説ーRh(+)血液型と短頭の父系 C による多様化と均質化

○酒井哲夫（個人会員）

Morphology and Function of Pelvis

オーガナイザー：竹内京子（平成帝京大学）・中野良彦（大阪大学）

骨盤は、腹部内臓を支える入れ物であると同時に、上半身を支え、直立二足歩行するヒトの動きにおいて要となる重要な部位である。本シンポジウムでは、①魚類から哺乳類に至る腰帯の形態について系統発生的視点から概観したうえで、②霊長類の骨盤の特徴について、比較機能解剖学的に考察する。つぎに、③ヒトの骨盤の性差はどのような部位にあらわれるか、その要因は何か、④骨盤に現れる妊娠痕は何を反映しているのか、⑤姿勢保持や歩行時に重要な大腿筋群や寛骨筋群などは骨盤にどのような負荷を及ぼし、骨盤の形態と関係しているのか、人類の二足歩行の進化と関連付けながら考察する。さらに、⑥股関節（大腿骨）の内外旋の動きを通してみた骨盤の動きの評価から、日常生活行動力や競技力の評価を試みる。これらの知見を通して、直立二足歩行するヒトの骨盤の構造と機能について、脊椎動物の進化を背景とした理解を深めるとともに、健康で機能的な骨盤の意義について考える。

講演

1. 腰帯の機能形態的進化

○松村秋芳（防衛医大・生物）

2. 霊長類にみられる骨盤の形態的差異の要因について

○中野良彦（大阪大・人間科学）

3. 寛骨の形態的特徴に基づく人骨の死亡年齢推定と性別判定

○長岡朋人（聖マリアンナ医大・解剖）、森田航、佐藤勇生（京都大・理）、平田和明（聖マリアンナ医大・解剖）

4. 骨盤上の妊娠出産痕の原因

○五十嵐由里子（日本大・松戸歯）

5. 人類骨盤の進化 一股関節駆動筋の機能形態学的分析

○馬場悠男（国立科学博物館・人類）

6. 股関節回旋運動から見た骨盤の動きの評価—日常生活行動力および競技力評価の試み

○竹内京子（帝京平成大院・健康科学）、松村秋芳（防衛医大・生物）、菊原伸郎（埼玉大・教）、煙山健仁（防衛医大・生理）、西田育弘（防衛医大・生理）、岡田守彦（帝京平成大院・通信）

コメンテーター 真家和生（大妻女子大）

S2 旧人・新人の交替劇における古気候変動の影響：

11月2日 13:00-15:00 B会場

地球物理学・空間情報科学・年代学からのアプローチ

Impact of climate change on the replacement of Neanderthals by Modern Human in the light of geophysics, spacial information science and geochronology.

オーガナイザー：米田穰（東京大学）

人類進化の背景には全球的・地域的な環境変動が強く影響したと考えられているが、実際の因果関係については理解がすすんでいない。本セッションでは、約4万年前におこった旧人と新人の交替劇において古気候変動が与えた影響を、地球物理、地球化学、地形情報解析、年代学などの視点から議論する。近年、利用が可能になった古気候シミュレーション、地球化学プロキシ、較正放射性炭素年代、地理情報システムに基づく生態学ニッチモデルなどをこの問題に応用することで、新人による旧人の交替劇について、現時点でどこまで議論ができるのか、を検証する。また、交替劇の究極原因のひとつとして提案されている「学習能力仮説」の検証に必要な新たな技術について、現在の開発状況と将来の応用可能性について報告する。

講演

1. 旧人と新人の気候変動の関連性の分析

○米田穰（東京大・総研博）・小口高（東京大・CSIS）・横山祐典（東京大・大海研）・川幡穂高（東京大・大海研）・阿部彩子（東京大・大海研）

2. 生態文化ニッチモデルの改良：ヨーロッパの旧石器遺跡を例に

○近藤康久（東工大・情報理工／学振）、大森貴之（東大・総合研究博物館）、亀井宏行（東工大・情報理工）、小口 高（東大・空間情報科学研究センター）

3. 古気候モデリングによる人類学研究

○陳永利（東大）、阿部彩子（東大、海洋研究開発機構）、大石龍太（東大）

4. 放射性炭素年代データを用いた古人口変動推定

○大森貴之（東京大・博物館）、米田穰（東京大・博物館）

Indigenous American people after crossing Beringia

オーガナイザー：植田信太郎（東京大学）

アジアを起源とし北東シベリアを経由してベーリング陸橋を渡った人々は、その後、短期間で南アメリカ大陸の南端にまで広がったと考えられている。そして、一万数千年後の西暦1492年のコロンブス来航を機に、ヨーロッパから、そしてアフリカからの人々の移入によって、アメリカ大陸の先住民集団は極めて大きな影響を受けたとされている。ベーリング陸橋を渡り、北アメリカで拓がり出すまでに關しては数多くの研究がされているが、その後に関する科学的解明は未だ進んでいない。本シンポジウムでは、南北アメリカ大陸を結ぶパナマ地峡への玄関口であるメソアメリカの人々、具体的には、(1) 数十万の人口を擁するマサウアならびにサポテカの2つの現生人類集団、(2) 最盛期には人口10万以上の都市であった先コロンブス時代のテオティワカン遺跡から出土した古人骨、これらの遺伝学的解析を通じて、ベーリング陸橋を渡った後のアメリカ先住民について考えていきたい。また、髪の毛や石灰岩層などから発掘された生物遺骸とは異なり、“普通の出土古人骨”から取り出されたDNAは、その99%以上は土壌菌由来のDNAである。これら“普通の出土古人骨”からミトコンドリア全ゲノムのDNA配列を高い信頼性をもって決定するための実験手法を確立したので、併せて報告する。

講演

1. メソアメリカ先住民集団の二重構造

○水野文月（東大・院理）

2. アメリカ地域先住民集団のコロンブス以後の人口減少

○五條堀淳（総研大・先導研）

3. 新大陸における都市文明の形成と社会進化：テオティワカンのモニュメント研究から

○杉山三郎（愛知県立大学・院国際文化研究科）

4. テオティワカン遺跡・月のピラミッドに埋葬された生け贄個体のミトコンドリアDNA分析

○王瀝（杭州師範大・加齢研）

5. 出土古人骨のミトコンドリア全ゲノム塩基配列の決定

○植田信太郎（東大・院理）

Research for Pleistocene human at the Shitsukari-Abe cave site

オーガナイザー：奈良貴史（日本歯科大学）

慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室を中心とする調査団は、2001年より旧石器と人骨および動物骨を同時に発見することを目的にして、青森県東通村尻労安部洞窟において発掘調査を行っている。

2001年～2011年までの調査において、人類化石は出土していないが、後期旧石器時代の地層からナイフ形石器等3点の定形的石器とその周辺からウサギの歯を多数発掘した。ナイフ形石器の近辺から出土したウサギの臼歯破片からは17,110±93 BP(未校正)という測定年代を得ている。さらに、この層からは大型と思われる偶蹄類の歯、ムササビ、食肉類の歯も出土していることから、本遺跡における人類活動の証拠は、より多様である可能性が高い。日本列島において旧石器時代の主要な遺物である上記のような定形的な石器に動物骨が伴う例はなく、本調査は、更新世の人類活動の復元に多大に貢献すると思われる。したがって、この調査は継続中だが、これまでの成果を公表することの意義は高いと考え、当シンポジウムを企画した。内容は、これまでの本調査の概要に加え、石器の形態学的検討および理化学的分析による石材産地推定、ならびに動物遺存体等の調査研究成果を発表する。

講演

1. 尻労安部洞窟遺跡の発掘調査

○奈良貴史（日本歯科大・新潟生命歯学）、鈴木敏彦（東北大・院歯）、高田学（開智高校）、千葉毅（神奈川県立歴史博物館）、金井紋子（慶大院・文）

2. 尻労安部洞窟遺跡出土の後期更新世哺乳類化石 一堆积物の精密水洗によって得られた化石の研究

—

○河村善也、村田 葵（愛知教育大）

3. 旧石器時代の狩猟活動—尻労安部洞窟遺跡の更新世動物遺体—

○澤浦亮平（慶大・文化財）、佐藤孝雄（慶大・文）、澤田純明（聖マリ医大・解剖）

4. 下北半島出土旧石器の微細構造解析による石材産地の特定

○平子智章、鈴木哲也（應大・理工）、堀秀道（ホリミネラロジー株式会社）、小林一広（日本歯科大・新潟生命歯学）、阿部祥人（慶大・文）

5. 日本旧石器時代研究における尻労安部洞窟遺跡の調査の意義

○阿部祥人（慶大・文）、渡辺丈彦（奈良文化財研究所）

ヒトの動作計測は、人類学はもとより人間工学、そしてスポーツの分野において広く行われている。動作分析において最も広く行われている手法では、被験者の身体上の特徴点(頭頂、外耳道、関節など)の皮膚あるいは着衣上に目印を貼り付け、動作中のこれらの二次元座標値あるいは三次元座標値を短い時間周期で計測し、これらの特徴点を各時点においてつなぎ合わせることによって身体形状を復元し、これによって身体動作を数値的に表現することが行われる。特徴点に貼付した目印の座標値を求める手法としては、光学的なもの、超音波を使用したもの、磁気を利用したもの、加速度計を使用したものがある。近年、デジタルカメラに代表される光学電子機器の急速的な開発により、ヒトの動作計測を光学的に簡便に行えるようになってきた。とくに被写体までの距離を同時に測定できるビデオカメラ(マイクロソフト社の Kinect、ASUSTek 社の XTION PRO LIVE)が低価格で発売されるようになり、以前に比べかなり安価かつ簡便に十分な精度をもつヒトの運動計測が行える可能性がでてきた。本シンポジウムでは、ヒトの動作の特徴に関する基調講演に続き、これらの装置の概要を紹介し、その応用例、さらに発展性について紹介したいと思う。

講演

1. ヒトらしい動きを考える

○香原志勢 (名誉会員)

2. Kinect™の原理と精度

○持丸正明 (産総研・デジタルヒューマン RC)

3. Kinect™の動作計測への応用

○足立和隆 (筑波大・体)

Teeth and clinical dentistry in the Edo era, Japan.

オーガナイザー：金澤英作（北原学院歯科衛生専門学校）

江戸時代人の歯については徳川将軍や側室など特別な地位にいた人々の歯の特殊な形態が注目される一方、最近の考古学的発掘によって武士や庶民についても報告が蓄積されている。これらの資料から江戸時代全体の日本人の歯の形態の分布や平均像は明らかになりつつあるが、一方で考古資料として残る歯や骨については、当時の歯にまつわる習慣や歯科医療の実態と深い関係がある。したがって人類学的調査と同時に歯科医療的知識による考察も重要なものとなる。

本シンポジウムでは、最近調査が行われた上野寛永寺の墓地移設に伴う将軍や側室の歯を中心に、江戸時代人の歯の形態、むし歯の罹患率や分布などの人類学的調査の報告と、お歯黒や入れ歯など、当時の習慣や歯科医療についての最新の報告を受け、総合的討論を行うことにより、人類学と歯科学の融合を図る。

講演

1. 寛永寺出土徳川将軍家親族遺体の歯に見られる特徴
○中山光子（オウル大・歯）、茂原信生（国立奈良文化財研究所）
2. 江戸時代人の歯から現代を視る
○藤田 尚（新潟県立看護大）
3. 武士と庶民の歯
○小山田常一・北川賀一・真鍋義孝（長崎大院・顎顔面解剖）
4. 江戸時代の歯科治療 一歯痛・抜歯・入れ歯一
○大野肅英（神奈川県歯科医師会、歯の博物館館長）
5. 江戸時代における歯の人類学研究の意義
○金澤英作（北原学院歯科衛生専門学校）

Diversification and homogenization of modern humans viewed from genes and cultures

オーガナイザー：斎藤 成也（国立遺伝学研究所）

現生人類は、およそ20万年ほど前にアフリカから拡散をはじめた。その後ユーラシア大陸に進出し、ヨーロッパとアジア、さらにスンダランドを南下してサフルランドへ、北上してベーリンジアからアメリカ大陸へと拡散していった。数千年ほど前になるとオセアニアからマダガスカルまでの広い範囲に拡散していった。このあいだに生業様式は採集狩猟に農耕牧畜が加わり、人口が急速に増加していった。現在では、これらの多様化は、遺伝子と文化の混淆により失われつつある。

本シンポジウムでは、現生人類の多様性が地球上への拡散につれてどのようなパターンで増加していったのか、また長いあいだに培われたこの多様性が近年急速に失われて均質化している側面を、遺伝子と文化の双方から検討してみたい。遺伝子の場合には、近年膨大なデータが蓄積しているゲノム規模のSNPデータの解析結果を中心とし、文化の場合には言語や考古遺物などを中心とする。

講演

1. **考古データから見たオセアニアにおける現生人類の多様化と均質化**
○印東道子（国立民族学博物館・民族社会）
2. **骨と歯の形態データから見た東南アジアにおける現生人類の多様化と均質化**
○松村博文（札幌医大・医）
3. **日本人特有な HLA ハプロタイプの起源について**
○颯田葉子（総研大・先導研）
4. **The history of human populations in the Japanese Archipelago inferred from genome-wide SNP data with a special reference to the Ainu and the Ryukyuan populations**
○JINAM, T., NISHIDA, TOKUNAGA, K., SAITOU, N.
5. **遺伝子と言語のデータから見た東アジアにおける現生人類の多様化と均質化**
○斎藤成也（国立遺伝学研究所，総研大遺伝学専攻，東京大学生物科学専攻）

Researches on Dog Remains Excavated from Kamikuroiwa Rock Shelter Site.

オーガナイザー：佐藤孝雄（慶應義塾大学）

我が国最古の埋葬犬は愛媛県上黒岩岩陰から出土した二体であるといわれている。しかしながら、1962年に発掘されたそれらについては、これまで詳細な報告がなされることなく、半世紀あまり行方も知れぬままとなっていた。慶應義塾では年来この資料の探索を続けた結果、昨年ようやくそれと推定し得る資料を発見するに至り、目下、複数の機関に年代測定を依頼するとともに、形態的特徴の観察・把握に努めている。加えて資料の一部からは、既にDNAや安定同位体を抽出することにも成功し、同埋葬犬の遺伝的系統、食性などについても議論できる見通しも得た。そこで、本シンポジウムでは、それらの観察・分析結果を順次報告、これまでの列島ひいては東アジアの古代家犬の研究成果も踏まえた上で、上黒岩遺跡出土埋葬犬骨の資料価値を評価することを試みたい。

講演

1. 上黒岩岩陰の発掘と埋葬犬発見の経緯

○佐藤孝雄（慶大・文）、安藤広道（慶大・文）、阿部祥人（慶大・文）

2. 資料の年代と石灰岩の岩石学的分析結果

○橋本真紀夫（パリノ・サーヴェイ）、吉田邦夫（東大・総博）、覚張隆史（東大・総博）、米田穰（東大・総博）

3. 上黒岩岩陰犬骨の形態的特徴

○小宮孟（慶大・文）、澤田純明（聖マリアンナ医大・医）、佐伯史子、佐藤孝雄（慶大・文）

4. 上黒岩岩陰の埋葬犬の遺伝的系統について

○増田隆一（北大・院理・多様性生物）

5. 上黒岩岩陰（遺跡）におけるヒトとイヌの関わりあいの復元 安定同位体分析によるアプローチ

○覚張隆史（東大・総博）、米田穰（東大・総博）

(骨考古学分科会)

Introduction of domestic animals to Japanese Archipelago in the context of human history in East Asia – Zooarchaeological perspective –

オーガナイザー：鶴澤和宏（東亜大学）、本郷一美（総合研究大学院大学）

動物遺存体の研究は日本列島における人類集団の生業、食性、居住環境等について、その変遷過程と地域性を明らかにしてきた。出土分類群の種名表提示から始まった研究は、近年では分子生物学的手法、地球科学的手法の導入により、人類学との関連においても新しいステージに入っている。すなわち、生業の復元に代表される特定の時代、地域における過去の人類行動の推定から、動物との関わりを通じて復元される人類集団の適応史の構築に研究テーマの広がりをみせている。

本シンポジウムでは、ブタ、ウマ、家禽など、日本列島の動物相に存在しなかった家畜が、いつどのように導入され拡散したのか、またそれにより列島各地における社会はどのように変化したかについて、研究の現状を整理する。

家畜の導入と拡散は、人類集団の移動、拡散あるいは文化伝播の問題と直結する。日本列島における人類集団、社会、生業基盤の重層性、地域性を議論するうえで格好の人類学的なテーマである。様々な分析手法を横断して研究成果を集積し、動物との関わりから見た人類史構築の現状を概観する。

講演

1. 臼歯形状解析による遺跡出土馬の系統分類

○植月 学（山梨県博）・津村宏臣（同志社大・文化情報学部）

2. 日本列島におけるイノシシの家畜化について・骨形態学的アプローチ

○姉崎智子（群馬県立自然史博）、本郷一美（総研大・先導研）

3. 先史時代 琉球列島へのイノシシ・家畜ブタ導入：遺跡・現生 Sus 属資料の DNA 解析を中心に

○高橋遼平（総研大・先導研/学振 DC2）、佐藤孝雄（慶應大・文学部）、松井章（奈文研）、姉崎智子（群馬県立自然史博）、石黒直隆（岐阜大・応用生物）、本郷一美（総研大・先導研）

4. 古 DNA 分析で探る日本在来犬と日本のオオカミの遺伝的關係

○石黒直隆（岐阜大・応用生物）

5. 列島へのニワトリの導入とその意図に関する一考察

○江田真毅（北大・博物館）

6. 安定同位体分析による動物の移入の検証

○石丸恵利子（熊大・埋文センター）

コメンテーター

1. 近年の動物考古学研究の新たな枠組み

○松井 章（奈文研）

2. 日本列島における家畜史研究の現状と課題

○西本豊弘（歴博・考古）

Anthropology and the recovery of human skeletal remains of war dead during WWII

オーガナイザー：榎崎修一郎（生物考古学研究所）・坂上和弘（国立科学博物館）

太平洋戦争における我が国の戦没者数は約 310 万人を数えるが、その内の約 240 万人が海外で戦没したと推定されている。彼ら戦没者の遺体を日本に還すことが「戦没者遺骨収集事業」であり、これまでに、厚生労働省及び民間団体によって約 127 万人が収集された。しかしながら、戦没者の約半数である 113 万人はまだ現地に眠ったままである。

2010 年、厚生労働省は日本人類学会にこの遺骨収集の協力を求め、同省社会援護局援護企画課外事室の人類学専門員として委嘱関係を結んだ。その業務は日本人戦没者と思われる遺骨を人類学的に鑑定することである。

本シンポジウムでは、この制度以前から派遣されていた人類学者の遺骨収集の事例、制度発足後派遣された主に太平洋地域の遺骨収集の事例、沖縄における鑑定の事例などを報告したい。

趣旨説明（榎崎修一郎・坂上和弘）

厚生労働省経緯説明（厚生労働省担当官）

講演

1. 国内の遺骨収集事例：沖縄

○染田英利（防衛医大）、譜久嶺忠彦（琉球大・医）、石田肇（琉球大・医）

2. 海外の遺骨収集事例：制度前のマーシャル諸島とキリバス

○片山一道（京大名誉教授）

3. 海外の遺骨収集事例：制度後マーシャル諸島

○榎崎修一郎（生物考古研）

4. 海外の遺骨収集事例：制度後パラオ・ペリリュー島

○坂上和弘（国立科学博物館）

5. 海外の遺骨収集事例：制度後キリバスとサイパン

○土肥直美（琉球大・医）

6. 海外の遺骨収集事例：制度後フィリピン

○橋本正次（東歯大・歯）

7. DNA 鑑定による戦没者遺骨の身元確認

○梅津和夫（山形大・医）

Evolutionary Anthropology of Conflicts and Resolution

オーガナイザー：山極寿一 (京都大学)

人類の生態資源と社会資源をめぐる葛藤の進化史的背景の解釈にはこれまで大きな誤解があった。人類が進化の初期段階から大きな脳による高い知性で狩猟を中心にした生業活動を開始し、その技術を集団間関係に適用して支配・被支配の社会関係を構築したとする考えである。それが、現代の人間社会の資源をめぐる闘争回避を困難にする原因となっている。霊長類学、生態人類学、先史人類学はそれぞれの分野でこの問題を論じてきたが、まだこの誤解を解いて新たな仮説を提示するには至っていない。そこで本シンポジウムは3つの分野の総合的な視野から、人類が示す資源利用とそれをめぐる闘争回避の方法がどのような進化の過程をたどってきたかを再構築し、人類が経験してきた資源をめぐる葛藤とその解決につながる規範の進化史的意義と現代への応用可能性を考察する。

講演

1. 資源をめぐる葛藤の進化史的背景

○山極寿一 (京都大・理)

2. 生理的ストレス応答からみる霊長類の葛藤

○藤田志歩 (鹿児島大・獣医)

3. 化石狭鼻類群集における競争とニッチ分割

○中務真人 (京都大・理)

4. アフリカ農耕民の森林資源をめぐる葛藤

○木村大治 (京都大・アジア・アフリカ地域研究研究科)

ディスカッサント

竹ノ下祐二 (中部学院大)、河合香吏 (東京外国語大・AA研)

The Issues and prospects of Public Archaeology: Whose's research?

オーガナイザー：加藤博文（北海道大学）

本シンポでは、遺跡や遺物といった歴史文化遺産や研究活動が誰のためになされるべきなのか、研究者のマイノリティや先住民族を含めた地域社会、市民社会への説明責任をとりまく多様な課題を広く議論することを目的としている。

研究者と地域社会との関係を議論する機会は、国内外において広く議論される機会が増えている。調査研究の進展と高精度化は、一方において調査研究成果の市民や地域社会への還元が難しい状況も生み出している。また誰にむかって研究成果を発信するのかという点においてもステークホルダーの多様性が指摘されている。本シンポを通じて、研究者の役割、地域社会との関係など現状課題の抽出と将来的な課題について議論を行いたい。

講演

1. アメリカ合衆国における文化資源管理—南西部ニューメキシコ州の例—
○中沢祐一（北海道大・医）
2. パブリック考古学における「市民」の多様性：イスラエルを事例として
○岡田真弓（北海道大・アイヌ・先住民研究センター）
3. 世界遺産知床における public archaeology のとりくみ
○岩波連（北海道大学・文）
4. 考古学における地域連携の手法と課題
○平澤悠（北海道大・文）
5. アイヌ文化遺産に関する地域住民参画の調査・保全・活用
○吉原秀喜、長野 環（北海道平取町アイヌ文化環境保全調査室）
6. 瀬戸内海における市民を中心とした考古学的取り組み
○遠部 慎（徳島大学・埋蔵文化財調査室）

Newly Compiled Biology Textbooks and Anthropology Education

オーガナイザー：松村秋芳(防衛医科大学校)・高山博(慶應義塾大学)

高等学校の新課程生物関連教科書は、本年度から「生物基礎」が、来年度から「生物」の使用が開始される。これまでの一連の教育普及活動が反映されて、「生物」の教科書の中の自然人類学に関する記述は、出版社によって改変の度合いに多少差があるものの、従来に比べて改善され、全般的に拡充されることとなった。高等学校の教員からは新課程教科書を用いた授業を効果的に行うために、教材とするのに適当な自然人類学分野の知識やコンセプトの提供が望まれている。日本人類学会教育普及委員会では、このような要望に答えるために、高等学校教員等を対象とした講演会を東京都生物学会と共催で計画した。本講演会シンポジウムは、初等中等教育における人類学教育の教材情報を教員向けに提供するとともに、今後の活動の方向性について、研究者と教育現場の交流を図りながら探ろうとするものである。

講演

1. 高等学校学習指導要領の改訂と自然人類学
○市石博（東京都立国分寺高・生物）
2. ゲノム人類学の切り口から新課程教科書を読む
○太田博樹（北里大・医）
3. 自然人類学の要素を取り入れた博学連携プログラム
○高野 智（(財)日本モンキーセンター）
4. 霊長類のフィールドワークから新課程教科書の内容を考える
○五百部裕（椙山女学園大・人間関係）
5. 人間性の起源を探求する
○山極寿一（京都大・理）

S14 軟部人類学の再考—特に動脈系・末梢神経系の形態形成的変異— 11月4日 14:50-16:50 B会場
Reconsideration of the soft tissue anthropology -morphogenetic variation of arteries and periphery nervous systems-

オーガナイザー：影山幾男（日本歯科大学）、時田幸之輔（埼玉医科大学）

本シンポジウムでは、軟部人類学として、脈管系及び末梢神経系の形態形成の変異を取り上げる。日本における解剖体を用いた人体の変異の総合的な記述としては、足立文太郎博士による脈管系研究、舟岡省吾博士による末梢神経系研究などがある。これらの研究は多数例の統計であり、莫大な例数の多さに圧倒され、もはやこれを超えることはできないかに思える。すなわち既存の解剖学名や型に観察事実を当てはめようとする限り、先人の二番煎じとなってしまい、興味をそがれることを示唆している。

そこで、既存の解剖学名を一度捨て去り、新たに発見される様々な中間・移行的な脈管・神経の存在を正確に観察・記録・整理する。その後、仮説をたて考察することで新しい法則や原則の発見につながる。仮説はいろいろな角度から検証されその妥当性が客観的に認められた時に定説となり法則となる。

今回、脈管系・末梢神経系について、その起始、走行経路、分布や周辺構造物との位置関係に留意した肉眼解剖学的な調査を紹介し、今後の方向性を含めた幅広い討論を行う。

講演

1. 日本人成人における顎動脈の走行とその分枝について

○前田信吾（日歯新潟・解剖1）、相澤幸夫（日歯新潟・解剖1）、熊木克治（日歯新潟・解剖1）、影山幾男（日歯新潟・解剖1）

2. 後腭動脈の形態学的意義

○堤真大（神戸大・院保健）、荒川高光（神戸大・院保健）、寺島俊雄（神戸大・院医）、相澤幸夫（日本歯科大・新潟生命歯）、影山幾男（日本歯科大・新潟生命歯）、熊木克治（日本歯科大・新潟生命歯）、三木明德（神戸大・院保健）

3. 上殿動脈と仙骨神経叢の位置関係

○姉帯飛高（埼玉医大・院）、時田幸之輔（埼玉医大・保健）、小島龍平（埼玉医大・保健）、影山幾男（日本歯科大・新潟生命）、相澤幸夫（日本歯科大・新潟生命）、熊木克治（日本歯科大・新潟生命）

4. 側頭下窩に見られた新たな筋組織

○竹澤康二郎（日本歯科大・新潟歯）、影山幾男（日本歯科大・新潟歯）

5. 腰神経叢の構成分節と下部肋骨の形態

○時田幸之輔（埼玉医大・保健医療）

6. 比較解剖学に基づく体幹—上肢移行領域の形態学的特徴

○緑川沙織（圏央所沢病院）、時田幸之輔（埼玉医大・保健）、小島龍平（埼玉医大・保健）、影山幾男（日本歯科大・新潟生命）、相澤幸夫（日本歯科大・新潟生命）、熊木克治（日本歯科大・新潟生命）

7. ヒトを含む霊長類足底の筋群の形態とその支配神経の解析

○荒川高光（神戸大・保健）、寺島俊雄（神戸大・医）、関谷伸一（新潟看護大）

S15 ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：

11月4日 14:50-16:50 C会場

学習能力の進化に基づく実証的研究(3) - 成長と学習に関して

Replacement of Neanderthals by Modern Humans: Testing Evolutionary Models of Learning (3) – Learning and Growth

オーガナイザー：中橋渉（明治大学）

本シンポジウムは、標記プロジェクト（新学術領域研究 2010-2014）の全体構想を紹介した第1回シンポジウム（第64回日本人類学会大会、同名シンポジウム、2010）、進捗状況を紹介した第2回シンポジウム（第65回日本人類学会大会、同名シンポジウム、2011）に引き続き行うものである。本プロジェクトでは、交替劇の真相は旧人と新人の間に存在した学習能力・学習戦略の違いにあったとする「学習仮説」の実証的検証を行っている。本シンポジウムでは、旧人と新人の学習戦略の差が如実に反映されると考えられる、両者の成長の仕方の違いにテーマを絞り、化石人類学、考古学、理論研究、狩猟採集民研究、脳科学の立場からこの問題を検討する。

講演

1. 成長段階に依存する学習戦略の進化

○青木健一（東京大・大理）、若野友一郎（明治大・先端数理科学）、ロラン・レーマン（ロザンヌ大学）

2. ヒトの発達過程における脳の構造・認知機能の変化

○三浦直樹（東北工大・工）

3. 狩猟採集民の子どもの成長と学習

○寺嶋秀明（神戸学院大学）

4. ネアンデルタールの成長

○近藤 修（東京大・理）

5. ネアンデルタール人の成長と石器製作技術の習得

○西秋良宏（東京大・博）